

生活科

山岸 朋子

1 生活科における知識創造とは

実感から生まれる
気づき

交流から生まれる
新たな気づき

生活の中で生きて
働く知恵となる
気づき

生活科における
知識創造の定義

生活科の学習は、自分の身近な場所を探検し社会や自然とかかわる、季節や自然を感じながら作ったり遊んだりする、植物や生き物の変化や生命のつながりを感じながら育てる、伝承されてきた文化に親しむなど、子どもが「ひと」「もの」「こと」と夢中になってかかわる活動や体験が基盤となる。自分なりの思いや願いを持ち、試行錯誤しながら「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を楽しむ時、子どもはそれら対象の本質を実感し、気づきを自ら生み出していくことができる。

そして、その実感から生み出された気づきを直接及び間接的に交流し、紹介し合ったり、比べて考えたりすることで、自分の気づきを再確認し、さらに新たな気づきを生み出していくことができると考えている。

また、学習の中で生まれた気づきを「わかった」「できた」で終わらせるのではなく、生活の中で試してみる、応用してみる、継続していくなど、自分の生活に生かしていこうとすることも大切である。そうすることで、それぞれの気づきが生活と結びつき、生きて働く知恵となっていくからである。

これら一連の営みを生活科における知識創造ととらえる。つまり、生活科における知識創造を以下のように定義することができる。

自分なりの思いや願いを持って「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通して「ひと」「もの」「こと」に対する実感を伴った気づきを生み出し その気づきを自分なりに工夫しながら生活に生かしていこうとする営み

2 生活科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

(1) 生活科における「よさ」

気づき

共感と気づきの変容

活動の見つめ直し

自分自身の変化の
自覚

生活科における「よさ」とは、「ひと」「もの」「こと」とのかかわりを楽しむ中で、様々な気づきを生み出すこと、気づきの間接的・直接的な交流を通して共感的に思ったり気づきの質を高めたりしていくことである。

「どのようにして実感に至ったのか」「なぜそう感じたのか」などの点も含めて自分の活動を見つめ直し、気づきをより明確にすることで、「ひと」「もの」「こと」への気づきだけではなく、自分自身の変化へも思いが至るようにしていきたい。

(2) 「よさ」の共有のための手だて

① 可視化

学習のめあての自覚

客観的に見つめ直す
ことで生まれる
新たな気づき

ふりかえりの観点の
具体化

子ども自身が、自分の願いを実現させたいという強い思いを持ちながら「ひと」「もの」「こと」とかかわることが、気づきを生み出す原動力となる。子どもが学習のねらいを明確に持ちながら学習を進めていくことは、自分の活動や体験をふり返り、自分の変容を自覚するためにも重要である。子どもが必要感を持って「ひと」「もの」「こと」と十分に向き合い、自分の思いや願いを交流することができるような素材を吟味し、課題を設定していくことが可視化の土台になると考える。

また、自分の気づきや考え方、学習の進め方などを客観的に見つめ直す活動も大切である。自分の願いの実現をめざす中で、「ひと」「もの」「こと」の以前の様子、他の様子、以前の自分の気づきや考え方を比べたり関連づけたりしながら見つめ直すことにより、新たな気づきを生み出す機会とし、気づきや変化を自覚させることにつなげたい。

学習のふりかえりは、ワークシートや学習カードを活用し、具体的な観点を持って行うことができるようにする。また、単元を通して自分が気づいたことや感じたことを見

気づきを見つめ直す
表現活動

つめ直しながら表現していく活動を設定する。これにより、子どもの様々な感覚を働かせた気づき、「ひと」「もの」「こと」の本質に迫る気づき、友達との「かかわり」の中での自分の変化などについて、子どもがより自覚することができるようにしていきたい。

② 「かかわり」

気づきの質の向上

気づきの質をより高めていくためには、実感から生み出された気づきを紹介し合ったり、比べて考えたりしていくことが求められる。自分一人で夢中になって活動していても、自分なりに活動や体験を楽しみ、自分なりの気づきを生み出すことはできる。しかし、その気づきは限定的なものとなり、広がり期待できない場合が多い。友達と一緒に活動し、友達の活動の様子を見たり、話を聞いたり、友達に方法を尋ねたりする中で、自分の気づきと友達の気づきを比べて考える機会が生まれる。その中で、自分の「ひと」「もの」「こと」のとらえ方と友達のとらえ方を比較し、同異を知るであろう。それらの繰り返しによって、「ひと」「もの」「こと」に対する視野が広がっていく。友達と一緒に活動する中で、「一人で活動しても楽しいが、友達と一緒に活動すると、初めて分かることがあったり、いろいろなことに気づいたり、できなかったことができるようになったりするからもっと楽しい」という喜びを実感する経験を積むことが、知識創造を促していく上で大切になってくると考える。

体の様々な感覚を働
かせて実感する経験

しかし、生活経験が少ない1、2年生の子どもにとって、対象を様々な面からとらえることは難しい。そこで、「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験の中で、視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚など、体の様々な感覚を働かせ実感する経験を大切にしていける。体の様々な感覚を日常的に使っていくことで、子どもが元々持っていた感覚がさらに磨かれていく。それぞれの子どもが豊かに感じることができるようになれば、友達の活動の様子を見たり考えを聞いたりした時に、それらも具体的にイメージしながら受け止めることができると考える。

気づきの自覚を促す
体験

また、友達の気づきをさらに実感を伴ってとらえることができるよう、実際に体験しながら確かめる活動を設定していく。友達の気づいたことについて、見たり触れたりなど、実際に自分の感覚を働かせて感じることで、友達の気づきをより実感することができる。それらの経験を積み重ねることが、多様な見方、考え方感じ方を知る機会となると考える。友達の活動の様子を見て気づいたことや友達からアドバイスをしてもらったことなどについて再び自分で試してみることが、新たな気づきへとつながっていくであろう。

このように、自分なりの思いや願いを持ちながら体験し、友達とのかかわりから得た知識を再び自分で試し、気づきを実感していくことを繰り返すことによって、体中で納得することや共感的に思うことの「よさ」を感じることができると考える。

③ 実践的自覚へのデザイン

実生活に生きる力

生活科で得た気づきは、習得した知識を自分の生活に活かしてこそ、その意義を発揮するものが多い。年間の活動を見据えた単元設計や、次の活動や実生活へつなげる学習展開により、活動から得た知識や思いを自分の生活に向けて見つめ直し、日々の生活の中で使っていけるよう促すことが大切である。

自分自身の成長に気
づく学習記録

また、学習記録を残し、自分の活動をふり返ることができるようにしておく。季節を変えた活動や対象を広げた活動の際に、以前の記録と比べて「ひと」「もの」「こと」を見つめ直すことで、新たな気づきを生み出すことができると考える。また、それらの活動を通して自分自身の変化にも目を向けさせることで、自分の成長を感じることができるようしていきたい。

3 実践例 - 2年 -

(1) 単元名 とびだせピースタウン ～ピースタウンで大発見！～

(2) 本単元における知識創造

学校の周りの地域を探検し 見つけたことや気づいたことを交流する中で 学校の周りの地域の様子やよさに気づき 積極的に地域に目を向けることができる

本校の児童は、金沢市及びその周辺から通学してきている。登下校の際に平和町を徒歩で通る児童は、クラスの約4割であり、残りの児童はバスに乗って通過している。そのため、学校の周りの地域である平和町と自分自身の生活とのつながりの意識は弱く、平和町という地域の様子やよさに気づく機会は限られている。

本単元では、平和町について知っていることを出し合うことから学習を始める。学校の近辺に住んでいたりと、徒歩で通学していたりする子どもの中には、登下校時や遊びの中で見つけた植物などを紹介できる子どももいるであろう。しかし、多くの子どもは、平和町についてほとんど知識を持ち合わせていないことに気づくと考える。1日の多くの時間を平和町で過ごしていても平和町について知っていることが少ないという事実から、学校のある平和町の様子を知りたいという願いを起し、地域探検をスタートさせたい。

探検では、遠足で行ったことがある「平和町第一児童公園」「平和町公園」を核として、通り沿いに地域を見て回る。みんなで平和町を歩き、実際に自分たちの五感を働かせながら、植物や生き物、建物や店などについて自分なりの発見を集めていくことで、学校のある平和町の地域の様子や自然の様子を感じることができると考える。

次に、それらの発見を交流する。平和町の地図に発見を位置づけながら話を進めることで、同じ場所を探検しても様々な発見や見方があることに気づかせていきたい。また、友達の発見を聞き実際に行って見たい所を出し合い、次の探検へとつなげていく。このように実際に地域から発見したことを交流しながら探検を繰り返すことで、学校の周りの地域を身近に感じ、自ら進んで働きかけていこうとすること、さらに、自分の住む地域にも目を向けていくようになることを期待したい。

(3) 生活科における「プロセスの自覚」を促す・活かすために

① 本単元における「よさ」

学校の周りの平和町を探検し、発見したことを交流しながら平和町の地域や自然の特徴を知ること、探検が発見につながる楽しさを実感することを本単元における「よさ」ととらえる。

② 「よさ」の共有のための手だて

ア 可視化

単元の導入で、自分が平和町について知っていることを平和町の地図上に書き出す。これにより、自分が平和町について知っていることを視覚的に認識させる。そして、探検ごとに自分の発見を地図や発見カードなどのワークシートに記録していく。学習の初めと探検ごとの記録を比べてみることで、探検を重ねるごとに平和町への気づきや見方が増えていることを実感させたい。

また、学習のまとめとして新聞作りを取り入れる。グループごとにテーマを決め、探検活動を見つめ直す機会を持つことで、気づきをより確かなものにしていきたい。

イ 「かわり」

探検で発見したことは、発見カードに記入していく。その際、発見した内容と併せて発見の際に使った感覚や発見の拠り所となった友達の考えなども記録するようにしていく。

探検で発見したことを、紹介し合う場では、それぞれの発見を地図に対応させながら進め、自分の発見と友達の発見を比べながら紹介を聞く活動を取り入れる。そして、発見の紹介を通して、もっと詳しく見てみたくなったものを出し合い、紹介した子どもを案内役として、再びみんなで探検に行く。友達の気づきを聞くだけでなく、自分の感覚を働かせて実際に感じることを繰り返すことで、平和町の地域や自然の特徴を知ることの「よさ」を実感していけるようにしたい。

ウ 実践的自覚へのデザイン

探検学習は、目的意識が弱いと楽しい散歩で終わってしまう。「～のことを知りたい」という願いを強く持ちながら、五感を働かせて探検する「よさ」を感じ取らせたい。「こうしたら見つけられた」「他の場所と比べたら分かった」など、様々な感覚を使って探検したり、比べてみたりすることが新たな気づきを生み出す探検のポイントになると子どもが自覚することができれば、自分の住む地域を見つめたり、季節を変えて

探検をしたりする際に、地域や自然を見る眼として働くと考える。そのためには、自分の気づきの拠り所となった点を意識するよう働きかけたり、ワークシートや掲示に残したりしていく必要がある。探検学習の学び方という点からもふり返る場を持つことで、子どもの自覚を促していきたい。

(4) 単元計画 (総時数 15時間+課外)

主な活動と内容	「よさ」の共有に関する手だてと意図
<p>1 平和町について知っていることを話し合う (学校のある町はどんな所?)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何町か知らないよ ・どんなものがあるか知らないよ ・バスで通るだけだからあんまりわからないよ ・平和町だよ ピースタウンっていうからね ・むしむし公園も平和町にあるよ ・私の家も平和町にあるよ ・平和町ってどんな所かあまり知らないな ・毎日通っていてもあんまり考えたことがなかったよ ・みんなで平和町を探検しよう 	<p>可視化</p> <p>学校の周りのようすについて知っていることを書き出し、自分自身の平和町についての理解度を明確にすることで、平和町を探検したいという意欲を持たせたい。</p> <p>また、学習のスタートでの平和町への認識をワークシートや地図に記録しておくことで、学習を進めながら自分の変容を確認するための土台としたい。</p>
<p>2 平和町を探検し 発見したことを紹介する (平和町を探検して いろんなものを発見しよう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・むしむし公園へ行こう ・きれいな花が咲いているよ ・ツバメの巣があるよ ・平和町公園に行く途中に病院やお店があるよ ・きれいなバラが咲いているよ <p>(平和町を探検して 発見したことを紹介しよう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お店がそんな所にあったんだ ・自分も通っていたのに気がつかなかったな ・ツバメの巣を見てみたいな ・平和町のことが少し分かったよ ・もっと詳しく見たいことがあるよ ・また探検に行ってみよう 	<p>可視化 「かかわり」</p> <p>探検で発見したことを、発見カードに記録していく。その際、発見した事実だけではなく自分がどのようにして発見したか、その発見をどう感じたかも一緒に記録していくことで、ピースタウンに対する思いを広げさせたい。</p> <p>可視化 「かかわり」</p> <p>探検して発見したことを紹介する場面では、地図に発見を書き加えながら進めさせ、みんなで見つけたものを交流することでピースタウンの発見が増えることを視覚でとらえさせる。また、発見したものや発見した場所などの特徴にも思いが向くようにしていきたい。</p>
<p>3 もっと詳しく見てみたい場所を探検し 紹介する (もっと詳しく平和町を探検して 大発見しよう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お店がたくさんある場所は バスで通る場所だよ ・どんなお店があるか見てみよう ・きれいな花が咲いている場所があるよ ・この花の名前は何かだろう 調べてみよう ・違う場所にもこの花が咲いているよ ・平和町第一児童公園には栗の木があるよ ・秋になったらまた見に来たいな ・平和町に少し詳しくなったよ ・みんなで探検するといろんな発見があるね 	<p>「かかわり」</p> <p>友達の紹介を受けてもっと詳しく調べてみたくなった所を探検する。友達の話聞くだけでなく、実際に自分で探検することで、友達の発見のよさを実感することができると考える。また、紹介者が案内役をつと務めることで、自分で紹介する喜びも味わわせたい。</p> <p>可視化</p> <p>探検をして発見したことを、発見カードに記録する。前回の探検での気づきを比べることで、平和町に対する自分の認識の変化に気づかせたい。</p>
<p>4 探検して発見したことを地図や新聞にまとめる (探検して発見したことをまとめよう)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地図に見つけたことをつけ加えよう ・初めの頃と比べると見つけたことでいっぱいになったよ ・お店が集まっている所も分かったよ ・もっと調べたらまだまだ見つけよう ・発見したことを新聞にまとめよう ・お店のことを書こう ・花のことをまとめて書こう ・平和町公園の近くのことをまとめて書こう ・平和町にはすてきな所がたくさんあるね ・また自分でも見てみたいな ・自分の住む町のすてきな所も探してみたいな 	<p>可視化 「かかわり」</p> <p>対象、場所などまとめる項目をグループで相談して新聞を作る。探検したことをもう一度グループでふり返り、視点を持ってまとめていくことで、さらに平和町を身近に感じることができるようしていきたい。</p> <p>実践的自覚へのデザイン</p> <p>平和町に関する内容的な変容だけではなく、発見をするための探検のポイントについてもふり返る。これにより、季節を変えて行う探検ではより広い目で対象に目を向けることができるようにしたい。また、普段何気なく見ていた自分の身近な地域にも関心を持たせるきっかけとしたい。</p>

(5) 本単元における授業の実際と考察

本単元では、学校の周りの地域に目を向けること、自分なりのめあてを持ちながら探検を重ねることで平和町の中で自分が素敵だと思うものや場所を増やすこと、そしてより一層平和町に目を向けようとするのをねらって学習を進めた。

ここでは、①平和町に対する事実認識の自覚、②探検による気づきの変容の自覚、③新聞作りによる気づきの深まりの自覚、④長期的な気づきの変容の自覚について、可視化、「かわり」、実践的自覚へのデザインという三つの手だてをもとに考察していく。

① 平和町に対する事実認識の自覚

・可視化

本校の児童は金沢市内及びその周辺地域から通学している。家庭生活と平和町が離れている子どもが多いため、意識して学校の所在地である平和町の様子に目を向けることは少ない。そこで、平和町に注目させ、自分たちが平和町について何を知っているのか、また何を知らないのかという事実を自覚させることで、平和町について知りたい、探検したいという思いを持たせたいと考えた。

まず、子どもに平和町の主な道路と学校が記入されている地図を提示した。地図の中から学校を見つけることは、すぐにできた。そこで、「学校がある町の名前は?」「学校がある町のことで知っているものや見た

わからない	金沢市	平和町
17人	2人	17人

表1 学校がある町の名前は?

0個	1個	2個	3個	4個
22人	9人	4人	0人	1人

表2 学習前の平和町に関する知識

草・花・木	生き物	建物・店	その他
林 葉 小さな木		銀行 病院 アルコ マルモ チュールップ スーパー だるまや だんごや 駐車場	自衛隊 大通り 平和公園
3	0	13	5

表3 学習前の平和町に関する知識
—ワークシートへの記入—

ことがあるものは?」と問いかけ、地図やワークシートに知っているものを書き入れさせた。その結果、学校がある町が平和町だということを知っていた子どもは、半数に満たなかった(表1)。また、平和町にあるものについて記述できた子どもは、4割未満であった。つまり、6割以上の子どもが平和町にあるものを一つも思い浮かべることができなかったということである(表2・表3)。「平和町のことを全然知らなかった。」「平和町のことを知っていると思っていたけれど、本当はあまり知らなかった。」という感想からも、平和町について知っていることを書き出す活動によって、自分が平和町のことを知らないという事実を自覚するに至ったことが分かる。

その後、平和町について知っていることを出し合った。知っているものを紹介しながら、地図上に場所が分かるものを位置づけていったのだが(写真1)、地図に書き入れることができたものは、平和公園、だるまや、だんごやの3箇所であり、その位置も実際に正しいかは分からないという状況であった。ほとんど白紙に近い地図を見ることで、「自分だけではなくクラスみんなが平和町についてほとんど知らない。」ということがはっきりした。

これらの活動を通して、「だんごやを調べたい。」「公園のプールを見てみたい。」など、友達が紹介したものを自分の目で確かめたいという思いが出された。そして、「バスの中からでは見えないから、歩いて花や草を見てみたい。」「平和町について知らない人がいるから、町全体を探検したい。」など、探検に行ってもっと平和町のことを知りたいという思いが強まった。

このように、単元の導入において、平和町について知っていることを書いたり、出し合ったりすることで、自分たちが平和町について知らないという事実を自覚させ、「平和町探検を行うことで平和町のことを知りたい。」という思いを強めることができた。また、この話し合いの中で、「草・花・木」「生き物」「建物・店」という探検の観点も焦点化されていた。この導入での事実認識は、以後の活動で自分の変容を知る土台となった。

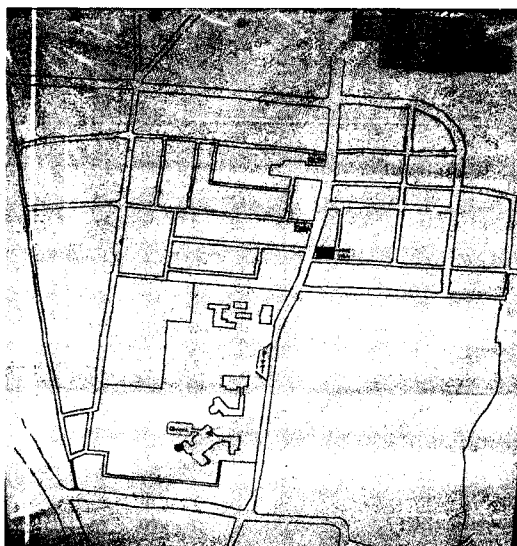


写真1 平和町には何がある?

② 探検による気づきの変容の自覚

・「かかわり」

平和町探検の際には、地図を見て位置を確認しながら歩いた。公園では、ルート上や公園で見つけたものを地図やメモに書き入れ、学校に戻ってから発見カードに気づいたことをまとめた。発見カードに自分がどの感覚を働かせて発見したか印をつける欄を作ることで、探検の際に五感を働かせることを意識づけた。

1回目の探検は、学校の裏門から出発した。学校の裏門のすぐ近くにある、アジサイ、ドクダミ、アカツメクサ、コバンソウなどの様々な草や花に興味を持った子どもが多く見られた。その後、平和町第一児童公園、平和町公園をまわり、学校の表門に至るコースで探検を進めた。探検中は、「草・花・木」「生き物」「建物・店」など様々な観点で平和町の様子を見ていたが、学校に戻ってカードに記録する際には、探検の初めに出会った草や花、公園での発見についての記述が多かった。

1回目の探検の後、クラス全体で発見を交流する機会を持った。自分の発見を五・七・五の俳句形式でカルタに表し、それを平和町の大きな地図に位置づけながら紹介した(写真2)。紹介する際には、どうしてそれを紹介したいと思ったのかも併せて話をさせた。ここでは、自分の生活経験と結びつけながら友達の発見を聞く子どもの姿も見られた(資料1)。



写真2 カルタを位置づけ発見を紹介

T : 平和町探検で発見したことを紹介しよう。
A児: 平和町公園に、ピンク色のちょっと薄めのバラがありました。
T : どうしてそれを選んだの?
A児: ピンクのうすい(色の)バラなんて 初めて見たからです。
B児: こちら辺に、ドクダミがありました。
T : どうしてドクダミ?
B児: 初めて見たし、友達が薬になると言っていたから。
T : お薬にもなるの?
C児: お茶にもなるよ。
D児: 前、おばあちゃんの家に行った時飲んだよ。ちょっと苦かったけど。
E児: ぼくも、Bさんと同じことを書きました。ドクダミを見たことがなかったから。
F児: ぼくもBさんと同じ所で見つけました。花びらが真っ白できれいでした。
T : ドクダミの花を見た人?
C : 大勢挙手
C児: ドクダミは臭いの、花はきれいなんだ。

資料1 地図上に位置づけながら発見を紹介する様子

その後、3人組で自分の発見を紹介する場を持った。子どもは、絵を見せながらカルタの文を読んだり、感じたことや気づいたことをつけ加えたりしながら自分の発見を紹介していた(写真3)。

そして、友達の紹介を受けて気づいたことや感じたことを出し合った。「アジサイにはいろいろな色があるということ分かった。」というG児の紹介を受け、そのカルタをつくったH児は、「アジサイにはいろいろな色があるんだ。ピンクとか水色とかあって、一つ一つが濃かったり薄かったりしたからびっくりした。」と自分の感じたことを詳しく話していた。これが、「アジサイが小さな花の集まりだということが初めて分かった。」というI児の気づきへとつながっていった。

カルタを地図上に位置づけた後、子どもからは紹介がなかったが、ツバメについて書かれたJ児のカルタを取り上げて紹介した。それまで「草・花・木」に偏っていた子どもの意識を「生き物」や「建物・店」など、他にも広げたいと考えたからである。これにより、生き物にも目が向き、ツバメやツバメの巣を自分で見てみたいという思いも高まった。

このように、学級全体→グループ→学級全体と活動の形態を組み合わせ、カルタを使って紹介することにより、子どもの気づきが広がっていく様子が見られた。ここで、教師が子どもの働かせた五感に注目させる手だてをとっていたならば、発見したものだけではなく、その発見に至る過程にもさらに目を向けることができたと考えられる。



写真3 3人組で発見を紹介

T : これ(ツバメがね はばたく音が がさがさだ) 気にならない?
J児: むしむし公園にツバメがいて、低い所を飛んでいました。近くで見たら、がさがさ羽の音が大きかったです。
T : 昨日、ツバメを見た人?
K児: むしむし公園で見ました。公園で初めて見ました。
L児: 友達の家でツバメの巣があったよ。今年はまだ来ていないけれど。
D児: 毎年来るんだけど、今年はまだ来ていない。

資料2 ツバメについての発見を紹介

平和町探検は、「めあてを持つ→探検する→探検を紹介する→地図にまとめる→新たなめあてを持って探検する→…」という学習の流れで進めた。友達の紹介を聞くだけでなく、実際に自分で探検し五感を働かせて感じることを繰り返すことで、平和町の地域や自然の特徴を知る「よさ」を実感させたいと考えたからである。

1回目の探検のふりかえりを終えた子どもの多くは、自分たちがあまり目を向けていなかった建物や店について調べたいという思いを持っていた。そこで、2回目の探検は、学校の表門からスタートし、平和町商店街、平和町公園を経て学校に戻るコースをとることにした。そして、登下校の際にこの道を通っている児童を案内役として探検を進めた。子どもは、探検前に紹介されていた店を探したり、近くを歩く友達に見つけたものを伝えたりしながら探検していた。また、食事ができる店の近くでにおいを嗅ぐ姿や、その店に行ったことがある子どもがおすすめメニューを紹介する姿も見られた。2回目の探検の発見カードの半数以上は、建物や店に関する記述であった。案内役の子どもが、「建物を見たら、知らなかった店や建物があってびっくりした。」「いつも表門から帰っているのに、探検をしてみて初めて分かったことがいっぱいある。」という感想を書いていることから、「建物や店などを調べる」など、自分なりの視点を持ちながら探検することで、普段何気なく見ている所から様々な発見をすることができるということに気づいたようである。また、平和町公園では、ツバメを見つけた子が、「ツバメがいるよ。見に来て。」と声をかけ友達を集めてツバメを見ていた。ツバメの羽音を聞き取ろうとしたり、ツバメの色に目を向けたりする子どもの様子から、1回目の探検の交流の際に友達から聞いたことについて、実際に自分の五感を使って感じ取ろうとする姿勢も見られた。

2回目の探検を紹介した後、もう一度学校の裏門付近にある「草・木・花」を見る、むしむし公園の本当の名前を調べる、ツバメの巣を見つけるなどのめあてをたて、3回目の探検を行った。1回目の探検で紹介されたドクダミ、コバンソウ、アカツメクサなどを初めて見た子どもは、じっくり見たりにおいを嗅いだり、触ったりしながら観察していた。前回の探検でもそれらを見ていた子どもは、コバンソウの色が茶色に変化していたことや、ドクダミの花が枯れていたことなど、数週間の間にも植物が変化することを発見し、季節が変わったらどのように変化するかを調べてみたいという新たなめあてを持っていた。ツバメが毎年巣をつくる場所には実際にツバメの巣はなかったのだが、「去年、カラスがその巣を襲ったので、今年はまだツバメが来ていないらしい。来るかどうか心配だ。」などの説明をしていた。また、「裏門コースには店がほとんどないと思っていたけれど、クリーニング屋が1件あった。前（2回目）、探検に行った時にもクリーニング屋が2件あった。平和町にはクリーニング屋が多いと思った。どうしてだろう。」など自分なりの疑問を表す子どももいた。むしむし公園では、平和町公園でも見つけた公園の看板を探し、公園の本当の名前が平和町第一児童公園であること、平和町第一児童公園にもツバメやムクドリがいることを発見するなど、探検を繰り返す中で、様々な観点を持ちながら平和町の様子やよさを発見している姿が見られた。

このように、探検→紹介→探検と、友達の発見を聞きながらそれらを実際に自分の感覚を働かせて感じることを繰り返すことで、友達の気づきと自分の気づきを関連づけ、新たな気づきを生み出している場面も見られた。また、探検の観点も広がり探検の仕方も工夫されてきた。しかし、校外に出かけ探検する機会は限られており、紹介の後、子どもの確かめたい場所をすべて探検することは現実には難しい。そこで、季節を変えて平和町を探検するなどの活動を設定することで、様々な子どもの願いがより実現できるようにしていきたい。

・可視化

前述のように、1回目の探検の後、発見したことをカルタにまとめ紹介しながら地図上に置いていった。「草・木・花」に関するものは緑色、「生き物」に関するものは青色、「建物・店」に関するものは黄色の台紙にカルタを貼り、どの場所でどんな項目の発見があったかが視覚的にとらえられるようにした(写真4)。

地図上に置かれたカルタの多くが緑色の台紙だったことから、子どもは、自分たちが1回目の探検で植物



写真4 地図にカルタを位置づける子ども

についての発見が多かったことに気づいた。そして、「その場所は自分も通っていたはずなのにそれがあったとは知らなかった。今度探検に行ったら、自分でもよく見てみたい。」など、カルタの中から、自分が実際に行って自分で見てみたいものを確認していた。また、黄色の台紙がなかったことから、「探検の時に建物や店も見えていたはずなのに、覚えていない。」「下を見ていたから草や花は見つけれられた。でももっといろんな所を見た方がよかった。」「平和町全部を見てまわると忘れてしまうから、分けて探検した方がいい。」などの思いが出された。地図にカルタを置き、平和町を地図上で見つめ直すことで、自分たちの

探検の仕方について考え直すとともに、次回の探検のめあてを持つことができたと考える。

色分けしたカルタを地図に位置づけることは、自分たちの発見を視覚でとらえ直すことになり、新たなめあてを持つことには有効であった。しかし、カルタのサイズが大きすぎたため、カルタで地図が覆われてしまい平和町の全体像が見えにくくなってしまった。そこで、2回目の探検からは、探検後に記入する発見カードに緑、青、黄色の色分けを加え、発見カードを使って発見を紹介した後、地図にカルタでまとめていく方法に変更した。発見カードを紹介に使うことによって、探検で発見したことがらについてより詳しく伝え合うことができた。また、同じ発見をした友達と相談しながら地図に貼りつけるカルタを作る場を設定したことにより、自分が気づいたことや感じたことの違いについて比べながら、自分たちの発見したことがより伝わるような言葉を選んでカルタにまとめる姿も見られた。カルタを地図に貼って気づきをまとめていくことによって（写真5）、発見したものだけではなくその特徴や、発見から感じたことも伝えることができた

1枚の地図に探検から気づいたこと、感じたことをカルタ形式で書き加えていくことは、友達の発見や感じ方をイメージ豊かに感じることができる方法であった。また、カルタが貼られていない地図の空白部分や貼られた台紙の色から、自分たちが気づいたこと、まだ気づいていないことが明らかになり、探検のめあてや見通しを持つことにつながった（表4）。そして、探検を重ねるごとに地図上に自分たちの発見が増えていくことで、子どもは探検して発見することの楽しさを感じていた。教室に掲示した地図を指し示しながら、友達に発見した内容を話す姿や、参観日に家族に自分の発見を伝える姿などからも、今までほとんど意識していなかった平和町に対して関心を深めていることが見て取れた。このことから、平和町の地図を使って学習を進めたことは、平和町に対する気づきや自分の気づきの変容を自覚させるための有効な手だてであったと考えられる。

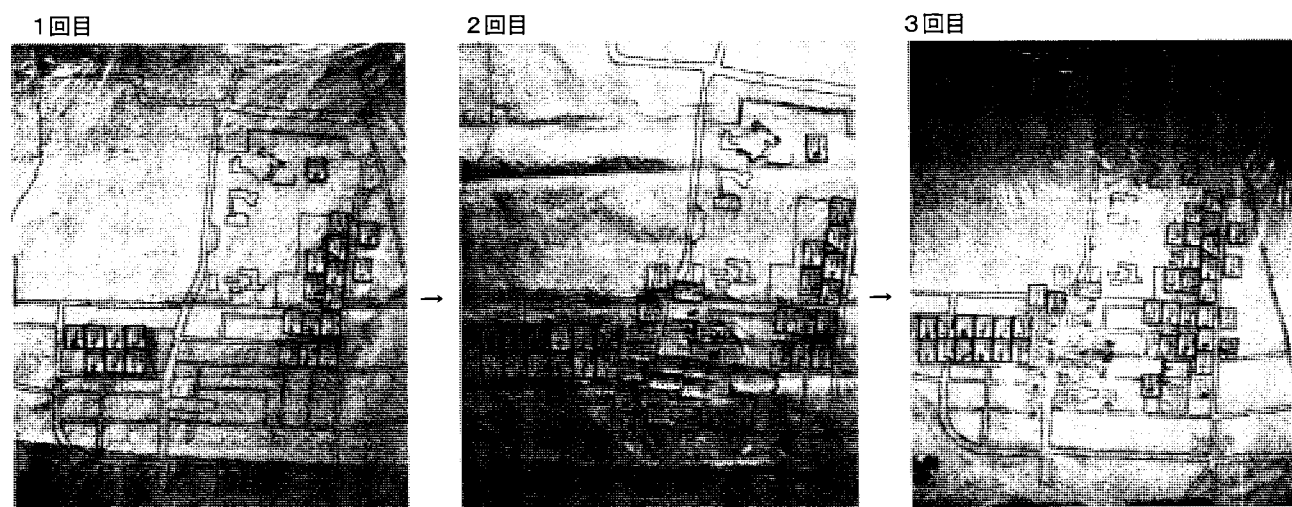


写真5 探検による気づきの変容

	探検前	探検 1 学校裏門 ↓ 平和町第一児童公園 ↓ 平和町通り ↓ 平和町公園 ↓ 学校表門	探検 2 学校表門 ↓ 平和町通り ↓ 平和町公園 ↓ 学校表門	探検 3 学校裏門 ↓ 市立病院裏 ↓ 平和町第一児童公園 ↓ 学校裏門	3回の探検の合計
草・花・木	3	71 (75%)	18 (15%)	45 (47%)	133 (43%)
生き物	0	19 (20%)	33 (27%)	14 (15%)	66 (21%)
建物・店	13	5 (5%)	71 (58%)	37 (38%)	113 (36%)
その他	5	0	0	0	0
合計	19	95	122	96	312

表4 探検による発見の変容（発見カードへの記入）

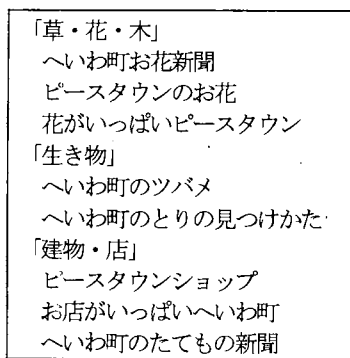
③ 新聞作りによる気づきの深まりの自覚

・可視化

3回の探検を通して気づいたことをふり返ることで気づきの質を高めることをねらい、単元のまとめとして新聞づくりを行った。

探検の記録をまとめた絵本を読み返しながら、自分が平和町探検で心に残ったこと、友達に伝えたいと思うことを出し合い、グループでテーマを決めた。決まった新聞のテーマは、「草・花・木」に関するものが四つ、「生き物」に関するものが二つ、「建物・店」に関するものが三つであった(資料3)。新聞のテーマを決め、記事を分担するための話し合いは、それぞれの発見を改めて紹介する場ともなった。書きたい記事について話し合う中で、自分と友達の発見を比べ、同じ発見に対して感じたことを伝え合うことで、一緒に探検に出かけても発見するものや感じ方が違うことに気づいていた。また、新聞の見出しをカルタにまとめたり(写真6)、伝えたいことを考えながら記事を書き、またそれを見直したりしていくことで、自分自身の平和町に対する認識の変容にも気づいていた。

単元のまとめとして、新聞作りという表現活動を取り入れたことで、必要感を持って自分の探検の発見をふり返ることができた。また、グループで記事を分担しながら新聞を作るという設定にしたことで、友達の発見や感じ方と自分の発見や感じ方を比べながら自分の学習を見つめ直す必然性も生まれた。このように、新聞づくりを通して、自分の平和町に対する発見を再び客観的に見つめ直すことで、平和町への気づきがより深まったと考えられる。本単元では自分の気づきを確認することに重きを置いたため、作った新聞は掲示することにとどめ、紹介する活動は行わなかった。新聞を掲示した後、感じたことやさらに調べてみたいと感じたことを交流する機会を持てば、さらに平和町への関心が高められたであろう。今後の単元においては、まとめとして取り入れた表現活動の活かし方を工夫していきたい。



資料3 新聞のタイトル



写真6 平和町新聞

④ 長期的な気づきの変容の自覚

・実践的自覚へのデザイン

校外へ出かける本格的な探検は、本単元が始めてであった。そこで、探検のめあてをしっかりと持たせることを重視し、自分の発見の不足を認識させることで次のめあてを持つことができるようにするなど、自分なりの思いを持って探検に臨めるよう心がけた。また、五感を使うなどの発見を生むための探検の工夫についてもふりかえりの際に取り上げることで、探検の内容だけではなく探検方法についても意識できるようにした。今後、探検学習を行う際に意図的にこれを繰り返すことで、より効果的な探検学習の取り組み方にも気づかせていきたい。

地図やワークシートは、後の学習で利用しやすいよう、絵本形式でまとめていった。絵本にまとめる形式は、「ようこそ1年生」「おいしい野菜をつくろう」の単元でも取り入れており、今回が3冊目となる。学習の記録を1冊の絵本にまとめ、すぐに読み返すことができるようにしておくことで、以前の自分の発見や学習の取り組み方と今の発見やその様子とを比較しながら学習を進めることができたと思う。今後の学習でもこの絵本にまとめていく形式を続け、必要に応じてそれらを利用しながら学習を進めることができるようにしていきたい。

また、先に述べたように、本単元では、平和町の大きな地図に発見したものを貼りつけていくことで気づきの傾向を視覚でとらえさせようとした。2学期にも平和町探検を行う予定であるが、その際には、気づきの傾向を視覚でとらえさせるだけではなく、今回の学習に使った地図と2学期の地図を比較させることで、季節によっての変化の有無、以前はなかった新しい発見、探検の取り組み方の違いなどの視点からも気づきを促していきたいと考えている。

(6) 単元を終えて

本単元でめざした知識創造は、「学校の周りの地域を探検し 見つけたことや気づいたことを交流する中で 学校の周りの地域の様子やよさに気づき 積極的に地域に目を向けることができる」であった。学習の初めには平和町にほとんど意識を向けていなかった子どもが、探検やその紹介、まとめなどの活動を通して平和町について自分なりの気づきを持ち、関心を向けるようになったことから（資料4）、単元の目標はある程度達成できたと考える。

- ・ たんけんする前は、へいわ町のことをぜんぜん知らなかったけれど、今は、花や木や店をいっぱいは見えました。前よりへいわ町のことの方が分かったのでうれしかったです。
- ・ へいわ町には、長さにはないしょうてんがいがありました。おべんとうやさんやラーメンやさんなどのたべもの店が多かったのでびっくりしました。
- ・ 前は、うらもんの所のたてもや店を見つけれなかったけれど、今日はいろんな店やたてものがわかってうれしかったです。毎日学校に行くときやかえるときに、歩きながらはっ見してみたいと思います。
- ・ わたしは、前は町のことをぜんぜん知らずにたんけんしていました。町のことを知っていくと、たしかめながら行けました。町のいろんなことが分かったのでよかったです。

資料4 探検のふりかえり「平和町を探検して」

その原動力となったのは、単元の初めに自分が平和町についてほとんど何も知らない、平和町のことを考えたことがないという事実を自覚させたことであった。学校に1年以上通っているのに平和町について知っていることが何もない、学校とバス停以外は地図に何も記入できない、クラス全員の知っていることを合わせてもほとんど地図に記入できないと言う事実を明らかにすることによって、平和町について知りたいという意欲が高まったと考える。

探検の形式としては、一斉探検、目的別グループ探検など、様々な形式が考えられるが、今回は、みんなと同じ場所を探検し、発見したことを紹介した後、またみんなで一斉に探検するという流れで学習を進めた。平和町の地理に不案内な子どもの安全面を配慮したためでもあるのだが、一斉に同じ場所を探検し紹介することで、自分と友達の発見を比べたり、それを自分で確かめたりすることができ、それが平和町の様子のような発見につながったと考える。ただ、一斉探検は気づきの共有という点では効果的であるが、探検できる場所や時間が限られ、子どもの個々の知りたいという欲求を満たすことは難しい。探検の形式を含めて、子どもの調べたいという欲求をいかに満たしていくかが今後の課題である。

このように、子どもは、平和町のこと知りたいという思いを持って学習を進めていた。また、気づいたことを友達に知らせたいという気持ちも強かった。しかし、それらが、子どもの日常生活に結びついたかという観点で見れば、そうとは言えない。「自分の家のある町には、公園は五つあるのに、平和町には二つしかない。どうして数が少ないのだろう。」「友達の発見を聞いて、平和町第一児童公園には大きな電灯があることが分かった。自分の家の近くの有松児童公園にも電灯があるか調べてみたい。」など、自分の住んでいる地域と平和町の発見を結びつけて考えている子どももいた。だが、多くの子どもは、探検活動には積極的に取り組んでいても、登下校の際に進んで新たな発見をしようとしたり、自分の住む地域について調べてみようとしたりするまでには至らなかった。学校での学習だけではなく自分自身の生活に結びつけていくためには、さらに手だてが必要であった。

一方、一連の学習を終えた子どものふりかえりには、次の平和町探検へと意欲をつなげている記述も見られた（資料5）。特に、「店の人にインタビューをして、もっと平和町に詳しくなりたい。」「秋になったら平和町の様子が変わるか調べたい。」という意見が多く見られた。本単元では、平和町についての発見を重ねることで、平和町に意識を向けることに重きを置いたが、今回は、一つの「もの」をじっくり見ること、「ひと」とかかわること、1学期と2学期の発見を比べることも重視しながら学習を進めるようにし、さらに広い視野で平和町をとくかわらせていきたい。

- ・ へいわ町だー公園があるということは、へいわ町だー二公園もあるはずなので、それも見たい。
- ・ あきに本とうにクリのみがなるか、へいわ町だーじどう公園に行ってしらべたい。
- ・ 次のたんけんは、あきやふゆに行って、春とかわつたところをたくさん見つけたい。
- ・ お店の人にどういとおしごとをしているかなどを聞いてみたい。
- ・ こんどたんけんに行ったら、お店の中に入って中をくわしく見てみたい。それから、お店の人にインタビューもしてみたい。
- ・ へいわ町には、本とうのへいわ町はかせがいると思うから、そのへいわ町はかせに聞いて、へいわ町のことをよく知りたい。
- ・ わたしがたんけんするときは、目だけをつかっていたのに、みんなはさわったりにおいをかいだりしていたので、わたしもそうやってはっ見したい。
- ・ へいわ町はかせになって へいわ町のことを知らない人に教えてあげたい。

資料5 探検のふりかえり 「今後の探検のめあて」